

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月30日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520267

研究課題名（和文）ホロコーストとユダヤ系アメリカ文学—持続と変容

研究課題名（英文）The Representation of Holocaust in Jewish American Literature: Its Continuation and Transformation

研究代表者

大場 昌子（OBA MASAKO）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：80160612

研究成果の概要（和文）：ユダヤ系アメリカ人作家がアメリカ社会で注目されるようになった1950年代から21世紀の現代に至るまで、第二次世界大戦中にナチス・ドイツによって引き起こされたユダヤ人大量虐殺（ホロコースト）が、彼らの小説の中で表現方法を変えながらも、創作上のテーマとして絶え間なく継承されている事実を確認した。さらに、その表現方法の一つとして、ユダヤの伝説上の人造人間である「ゴーレム」が現代作家の創造力をかきたて、ホロコーストの表象として扱われている事実を分析し、図書『ゴーレムの表象』としてまとめた。

研究成果の概要（英文）：The research group confirmed that the theme of Holocaust has been succeeded in Jewish American novels since 1950s, when Jewish American writers were given special attentions in the American society, to the present, while its representations have been transformed in many ways. In addition, we observed that the “golem,” a kind of android in Jewish traditional folklore, has been used as a representation of Holocaust by some eminent contemporary Jewish American writers. The research on the representation of “golem” is reported in a book *The Representation of Golem: Jewish Literature, Animations, and Films* published in 2013.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：米文学

1. 研究開始当初の背景

ユダヤ系アメリカ文学におけるホロコーストのテーマについては、これまで数多くの研究がなされてきた。しかし、現代に至るまで同テーマを系統的に追跡した研究は2004年に発表された *Jewish American and Holocaust Literature: Representation in*

the Postmodern World のみであり、さらにいえば日本における研究は手つかずの状況であった。本研究の研究者4名は全員ユダヤ系アメリカ人作家研究に長く携わっているが、半世紀以上を経て未曾有の大虐殺が文学作品の中でどのように描かれ続けるのかを包括的に把握し、より長い期間でのホロコー

スト文学の持続と変容を分析する必要性を強く認識に至った。

2. 研究の目的

第二次世界大戦中、ヒトラー率いるナチス・ドイツによって引き起こされ、推計約 600 万人が犠牲となったとされるユダヤ人大量虐殺（ホロコースト）が、同時代に生き、折しもアメリカ社会でユダヤ系作家が興隆をみる 1950 年代に中心にいた作家たちに及ぼした多大な影響を再確認することを起点とし、さらに後続の世代の作家たちが、歴史的事実としてのホロコーストを内的に継承し、ホロコーストが問いかける根源的な問題に、その新たな表現方法を追求することで依然として向き合っている事実を、21 世紀の現代に至るまで系統的に検証する。

少し具体的に述べることにする。ユダヤ系アメリカ人作家によるホロコーストの扱いには、複雑な面がある。主要な 4 人の作家も、ホロコーストの事実を除外して創作活動を行うことは不可能である一方、自らが直接体験していないことを扱うゆえのためらいや、彼らが米国の文壇で地歩を固め始めた 1940 年代、50 年代に真正面から論争的な主題を取り上げることに對する躊躇があったことは想像に難くない。事実、彼らが直接的にホロコーストにかかわる主題を作品で描くのは、1960 年代以降のことである。しかし、そうした彼らが 50 年代に発表した初期作品を詳しく検証すると、ホロコーストを背景に据えている事実が浮かび上がる。例としては、ベローの『宙ぶらりんの男』(1944)、『犠牲者』(1947)、マラマッドの「休戦」、短編集『魔法の樽』(1953)、シンガーの『モスカット一族』(1950)、『ゴライの悪魔』(1955)、およびショーの『若き獅子たち』(1948)などである。

その後、1960 年代、70 年代に入ると、コジンスキーの『ペンキを塗られた鳥』(1965)、マラマッドの『修理屋』(1966)、ベローの『サムラー氏の惑星』(1970)、シンガーの『愛の迷路』(1972)など、ホロコースト、あるいはそれに類似した極限状況を直接的に描く作品群が登場する。また、ロスの『欲望学教授』(1977)や『ゴーストライター』(1979)、ゲッターに住むユダヤ人の奮闘を描くエプスタインの『ユダヤ人の王』(1979)、ユダヤ人撲滅計画の責任者アイヒマンの裁判をテレビで見る人々を描くローゼンの『悪に触れる』(1969)にもホロコーストの影が色濃く反映されている。

そして 1980 年代以降、オジックは短編集『ショール』(1989)で真正面からホロコーストを扱い、他方、新しい流れとして、『アンヤ』(1974)でホロコースト生存者を描いたシ

ューファーがヴェトナム戦争を主題とする『バッファロー・アフタヌーン』(1989)を発表する。さらに、シェイボンはピューリッツァー賞受賞作『カヴァリエとクレイの驚くべき冒険』(2001)で、ヒトラーの脅威が迫るブラハからゴーレム(『ユダヤ百科事典』によれば、「聖なる名を用いる魔法の力によって人工的につくられた生きもの、とくに人間」)の力を借りて脱出し米国に渡る主人公を、またローゼンバウムは『ゴサムのゴーレム』(2002)で、今は亡きホロコースト作家たちがゴーレムとして蘇り、現代のニューヨーク人に様々ないたづらを仕掛け、人々が過去の記憶を取り戻す物語を描いている。さらに哲学研究者でもあるゴールドスタインは、女性として身体と知の関係性を探る中で、ホロコーストを普遍的な有責性の問題へと深化させている。こうした作品は、ポスト・ホロコースト文学の新しい方向性を示すものとして、注意を引いてやまない。

このように本研究は、ユダヤ系アメリカ人作家の半世紀にわたるホロコースト表象の変容を追跡することにより、筆舌に尽くしがたい悲惨な出来事が、時代ごとに多彩な表現を施され、新たな物語へと語り直されていく過程を明らかにすることができよう。

3. 研究の方法

(1) 戦後活躍したユダヤ系アメリカ人の主要な 4 作家(ソール・ベロー、バーナード・マラマッド、アイザック・バシエヴィス・シンガー、フィリップ・ロス)について、ホロコースト表象の観点からテキストを再読し、討論を重ねた。

(2) 現在活躍中の作家(シンシア・オジック、スーザン・フロムバーグ・シェーファー、レベッカ・ゴールドスタイン、ステイーヴ・スターン)のホロコーストを扱う作品を選別し、読書会形式の研究会でその独自性を検討した。

(3) ホロコースト文学批評の基本文献である S. リリアン・クレマーの *Witness through the Imagination: Jewish American Holocaust Literature* (1989) を読み直し、1980 年代以前の批評が、ホロコースト表象の側面ではなく、主題としてのホロコーストに焦点が当てられている点を認識した。また、ホロコースト・サバイバーであるヴィクトール・フランクルの古典的名著 *Man's Search for Meaning* (1959) も再読し、ホロコーストという未曾有の事件について原点に立ち戻って哲学的討論をおこなった。

以上の(1)~(3)について、年間 4 ないし 5 回の研究会を開き、口頭発表とそれに続く徹底した討論を繰り返し、各自論文を執筆した。

4. 研究成果

まず、主要な4作家—ベロー、マラマッド、シンガー、ロス—を再読した結果、ホロコーストの問題が扱われている作品について、彼らの力量が十分表出しているとはいえない面があることを確認した。

2010年12月の研究会ではスーザン・フロムバーグ・シェーファー(1941-)の『バッファロー・アフタヌーン』(1989)を取り上げ、ヴェトナム戦争を舞台とする同作品が、ホロコースト表象の一つの変容と理解しうる点を確認した。

また、2011年2月には、現代のユダヤ系作家たちがしばしば扱う「ゴーレム」を理解するために、公開シンポジウム「ゴーレムの表象—ユダヤの人造人間と現代」を、日本女子大学目白キャンパスに於いて企画・開催した。4名の研究者に加え、東京大学大学院教授の金森修氏、および大阪大学大学院准教授の片淵悦久氏にも参加していただき、金森氏が基調講演として「巫人ゴーレム」を、片淵氏がマイケル・シェイボン(1963-)の『カヴァリエとクレイの驚くべき冒険』(2000)について発表された。「ゴーレム」という表象をめぐって、ホロコースト、歴史、生命、継承といったテーマが浮かび上がり、ホロコースト表象と「ゴーレム」との関わりを精査する必要性を明確にすることができた。ゴーレムを主題とするシンポジウムの開催は国内初であり、大きな意義をもつものであった。

また、ホロコースト表象という観点ではもちろんのこと、作品自体も日本ではほとんど取り上げられることのないユダヤ系女性作家2人、レベッカ・ゴールドスタイン(1950-)とノーマ・ローゼン(1925-)を取り上げ、ゴールドスタインの*Mazel*(1995)とローゼンの*Touching Evil*(1969)を比較することで時代によるホロコースト表象の変容について把握した。しかし、女性作家のホロコースト表象に特徴があるか否かの議論までには至らなかった。

その他、ジャージ・コジンスキー(1933-1991)、スティーヴ・スターン(1947-)、シンシア・オジック(1928-)についても討論を行い、各作家が独自のホロコースト表象を展開している事実を確認した。

並行して4名は、2011年2月に開催したユダヤ伝説上の人造人間「ゴーレム」に関するシンポジウムの内容を各自深化させ、2012年3月までに論文を完成させた。4名の論文と、シンポジウムに参加していただいた金森修氏(東京大学大学院教授)と片淵悦久氏(大阪大学大学院准教授)の論文は、まとめて編集し、2013年1月に『ゴーレムの表象—ユダヤ文

学・アニメ・映像』(南雲堂)を出版した。ホロコーストとの関連において浮かび上がった「ゴーレム」は、文学作品や映像作品において様々に変容しながら今日まで受け継がれており、6名の論文はその事実を具体的に確認する結果となり、領域横断的な側面からも新機軸を打ち出すことができ、充実した内容になった。

総括として、第二次世界大戦後から現代に至るホロコースト表象を系統的に把握することが広く文学の可能性を追求する切り口になり得ることを確認できた。その一方で本研究はさらに一層の作家・作品研究を重ねる必要性があり、その結果としてホロコースト文学の持続と変容の過程をさらに詳細に捉えていくことの重要性を強く認識する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

- ①佐川和茂、「存続とユーモア——ショレム・アレイヘムの世界」、『笑いとユーモアのユダヤ文学』(南雲堂)、2012、pp. 13-26
- ②佐川和茂、「アイザック・B. シンガーの「魔女」——精神の核を探して」、『シュレミール』第11号、2012、pp. 15-21
- ③坂野明子、「ゴーレムと笑い：セイン・ローゼンバウムの『ゴサムのゴーレムたち』」、『笑いとユーモアのユダヤ文学』(南雲堂)、2012、pp. 180-197
- ④伊達雅彦、「〈嘲りの笑い〉から〈自虐の笑い〉へ——ソール・ベロー「ゴンザーガの遺稿」」、『笑いとユーモアのユダヤ文学』(南雲堂)、2012、pp. 97-111
- ⑤坂野明子、「ホロコーストとシャボン玉：レベッカ・ゴールドスタイン*Mazel*を読む」、『専修大学人文論集』第89号、2011、pp. 1-19
- ⑥大場昌子、「バーナード・マラマッドの世界観—『神の恩寵』の試み」、日本女子大学『英米文学研究』第45号、2010、pp. 51-60
- ⑦佐川和茂、「ユダヤ伝説ゴーレムを巡って」、『青山経営論集』第45巻第3号、2010、pp. 249-255
- ⑧佐川和茂、「スーザン・フロムバーグ・シェーファーの『アンヤ』と『水牛の午後』—ホロコーストよりヴェトナムへ」、『青山経営論集』第45号別冊、2010、pp. 29-38

[学会発表](計5件)

- ①大場昌子、「シンシア・オジックのゴーレム—ユダヤ伝説の蘇生」、日本アメリカ文学会第51回全国大会、2012年10月13日、名古屋大学(愛知県)
- ②佐川和茂、「存続とユーモア——ショレム

・アレイヘムの世界」(シンポジウム「笑いとユーモアのユダヤ文学」における発表)、日本ユダヤ系作家研究会、2012年3月24日、ノートルダム清心女子大学(岡山県)

③伊達雅彦、「〈嘲りの笑い〉から〈自虐の笑い〉へ——ソール・ベロー「ゴンザーガの遺稿」(シンポジウム「笑いとユーモアのユダヤ文学」における発表)、日本ユダヤ系作家研究会、2012年3月24日、ノートルダム清心女子大学(岡山県)

④坂野明子、「Rebecca Goldstein の *The Dark Sister* に見られる亡霊の新しい役割」(シンポジウム「〈亡霊〉で読むアメリカ文学」における発表)、東北アメリカ文学会、2011年6月22日、東北大学(宮城県)

⑤伊達雅彦、「ゴースト化されたゴーレム——セイン・ローゼンバウムの *The Golems of Gotham*」、日本アメリカ文学会東北支部、2010年11月20日、東北大学(宮城県)

[図書](計2件)

①大場昌子、佐川和茂、坂野明子、伊達雅彦編、南雲堂『ゴーレムの表象—ユダヤ文学・アニメ・映像』2013年、254ページ

②広瀬佳司、佐川和茂、大場昌子編、南雲堂『笑いとユーモアのユダヤ文学』2012年、282ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大場 昌子 (OBA MASAKO)
日本女子大学・文学部・教授
研究者番号：80160612

(2) 研究分担者

佐川 和茂 (SAGAWA KAZUSHIGE)
青山学院大学・経営学部・教授
研究者番号：20137871
坂野 明子 (SAKANO AKIKO)
研究者番号：20153900
伊達 雅彦 (DATE MASAHIKO)
研究者番号：00254889

(3) 連携研究者 なし